

△対談▽

宗教における魔・悪魔の問題(上)

西谷 啓治
阿部 正雄

一、問題の所在

阿部 きょうは『東洋学術研究』のほうから、私の最近書きました「非仏非魔¹⁾」という論文を中心として、西谷先生と対談をするようにということで、先生にはお忙しいなかを、おいでいただいたわけであります。この論文は、実をいいますと、私ここ三十年余りの間、ずっと抱えてきた問題を、一応この辺で何らかの形で締めくくりにつけたいと思って書いたものですが、書き始めましてから、他の仕事に妨げられたり、何度か外国へかなり

長期の講義に出掛けたりしましたために、書き上げるまでに前後三、四年ほどもかかってしまいました。しかし、自分なりに現在この問題について考えているところを、一応その結末まで書いてみたわけなのです。

この問題の起こりは何かといいますと、私がそれ以前の時期にもっておりました真宗の信仰が、久松先生との出会い、特に学道場²⁾での久松先生との参究を通して、最終的に崩壊してしまったということを契機として起こってきたわけでして、真宗でいわれる「よろずのこと、みなもて、そらごと、たわごと、まことあることなきに、

ただ念仏のみぞまことにておはします」という、そういう意味での宗教的な真実^{まこと}さえもが、なお虚偽ではないかということが、信仰の崩壊を通して私に非常に強く出てきたわけです。信仰の道におきましては、世間的なこと、この世的なことは、一切そらごと、たわごとであって、まことがない、という世間虚仮の自覚、深い虚偽の自覚を通して「念仏のみぞまことにておはします」という正信念仏の立場に帰入するのでありますが、そのような念仏信仰の立場が崩壊しました時、まことと信じられたその念仏さえもが虚偽だったということが、いや応なしに私に自覚されてきました。それは単に念仏はまことでない、というのではなく、念仏はたしかにまことであるが、それはまことのままに嘘だ、という自覚であります。それは、この世的にも、あの世的にも、つまり内在的にも、超越的にも、真実はありえないという、一切虚偽の自覚であって、そのような意味での一種のニヒリズムだったと思います。

そういうところに立ち至って、私は「神は神聖な嘘である」というニーチェに非常に共鳴をおぼえたわけですから、

が、そういう意味の一切虚偽の自覚というものが、さらに私のなかで「魔の自覚」というものにかわってきたといいますが、あるいは深まってきたわけです。それは私にとり必然的な歩みであつたと思います。といいますのは、真宗的な信仰にめざめた時、私どもは「本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏にまざる善なきゆへに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆへに」として、善悪を超えて「念仏者は無礙の一道なり」という、善悪から自由になつた信仰生活を生きるわけですが、そういう自分の信仰生活そのものが、私には、なおより深い意味において虚偽として自覚されてきたわけです。

そして、その時、自分はそういう信仰の名において実は魔の生活をしていていたのではないか。善悪から自由である無礙の一道を生きるということにおいて、私自身は実は、魔を行じていたのではないかということに気付いたわけです。なんとすれば、魔もまた善悪を超え善悪から自由でありますから、その限り信仰の道と魔の道は相表裏するところがありますから。そういう形で、一切虚偽

の自覚は、より実存的主体的には、魔の自覚へと深まってきたわけです。そこで魔という問題が私にとり、非常に切実な、自分の存在全体にかかわる問題になってきたわけです。ですから、魔といい悪魔といっても、それはなにか私の外にあるものではなく、また禅という魔境というようなことでもなくて、私自身が魔であつた、自分は信仰の名において魔の生活をしていたのではないかという自覚、そういう、いわば、「魔の自覚」ともいうべきことが、私にとって非常に大きな問題になってきたわけなのです。

それ以来ずっとその問題を抱えて、道場で坐禅をし、久松先生との参究を重ねてきたわけですが、そこで私にいくらかでも明らかになってきましたことは、久松先生が身をもって体現しておられる無相の自己に照してみれば、正信念仏において、如何に阿弥陀仏と一体となるといっても、その阿弥陀仏には普通の意味の相ではないが、なお一種の透明な相があり、したがってまた信仰においてそれと一体となるという自己にも、なお相ならぬ相があるということでした。このことの自覚が、まこと

なる念仏さえもが虚偽であるという自覚になったわけですから。そしてそのような虚偽の自覚を通して阿弥陀仏の立場を突き抜け、阿弥陀仏の背後へ自分が出てしまった時、そこに見出したものは、一切の生命が、仏の生命^{いのち}さえもが、死に絶えた絶対虚無の世界でした。阿弥陀仏の背後に開かれているのは虚無の深淵です。そしてこの阿弥陀仏という報身仏の背後に開かれた虚無の深淵にひそんでいるものこそ魔であります。阿弥陀仏のような人格神を信ずる者の眼には、魔のさだかな姿は見えませぬが、そのような人格神的立場がこわれた時、その背後にひそんでいた魔は、ぬつと姿を現わし、自覚化されます。しかし問題を手短かにいいますと、ここに自覚される魔にも、なお一つの相があります。仏ではない魔という相があります。したがって魔の立場をも超えたところまで行かなければならない。仏のみならず、魔も脱落する。そういうことが坐禅を通して自分にもはっきりしてきたわけです。仏にも非ず、魔にも非ずという非仏非魔の自覚を介して初めて、一切の相をはなれた無相の自己が自覚される、その間の問題をこの論文で扱ってみたわ

けです。

いま申しましたように、魔の自覚といいますが、私の場合、いままで自分は信仰の名のもとに、実は魔の生活をしていったのではないか、というふうな、過去形で魔の問題が出てきたわけですが、これはむしろ当然のことではないかと思えます。といいますが、元来魔というものは、ポジティブに現在形では存在しないものではないかと思えます。魔はいつもネガティブな形でのみ存在するものであって、現に自分は魔である、と現在形で自覚されるのではなく、むしろ自分は魔であつた、過去形ではじめて自覚されてくるものであると思います。したがってそういう魔の自覚に至ったときには、すでに半ば魔を超えたところもあつたといえるのではないかと思えますが、そういう魔も最後に何らかの形で脱落してしまつて、仏でもなく魔でもない、正に非仏非魔というところにほんとうの無相が現成する——そういうふうに私には思われるのです。

そういう自分の体験をもとにして考えていきますと、浄土教と禅、あるいはキリスト教と仏教というものの間

が問題になるかということ、それから、禅などで代表される悟りの立場で起こりうる魔の問題を多少とも詳しく考察しまして、そして最後には、そういう二つのタイプの宗教に相通するより深い宗教的自覚の問題とし、その場合、もし信仰の立場に立つ宗教を神の宗教とよび、悟りの立場に立つ宗教を無の宗教とよべば、神の宗教と無の宗教の間には、直接相通する道はありえないのであつて思弁に陥ることなくあくまで主体的実存的立場に立つ限り、神の立場から無の立場に行くにも、魔の問題をのりこえなければならぬし、無の立場から人格的な神の立場に至るためにも、どうしても魔の問題を超えなければならぬのではないか、そういう魔の自覚としての、ニヒリズムを超えるということを通してはじめて、神即無、無即神というような、宗教的自覚としてはいさばん徹底した立場に立ちうるのではないか、そういうのが大体この論文の趣旨なのです。

西谷先生もずっと以前から西洋の神秘主義の問題など深くおやりになっておられ、とくにヤコブ・ベーメなどに悪魔の問題が出ておりますし、その後先生のお仕事の

の問題も、一面これらの宗教は二つの違ったタイプの宗教であるとして、両者の相違をふまえてダイアローグをすればよいというだけではなしに、同時にその相違を超えて両者のより深い根もとを窮めるといふことがどうしても必要になってくると思えます。その場合には、神または報身仏の裏にひそむ魔という問題、それから宗教的、禅的無にかかわる魔の問題——それについては、今ここでいう暇がありませんが——に出くわすことなしには、これら二つのタイプの宗教の枠を破つて、そのより深い根源に入つて行くことは出来ないのではないか、既成の両者を超えたいちばん徹底した宗教的自覚に立つことはできないのではないか、そう私には思われるのです。その意味で魔の問題、そしてまた、仏にも非ず魔にも非ず、神にも非ず悪魔にも非ず、ということが、宗教的自覚の徹底ということにおいて、どうしても不可欠な問題になるのではないか、そういう気持ちで「非仏非魔」というこの論文を書いたようなわけです。

それで、はじめのほうに、親鸞やパウロなどに代表される信仰の立場において、どういう意味で魔ということ

なかでも、根源悪の問題とか罪の問題、さらにはダス・デモーニッシュエ (das Dämonische) というふうな問題も、先生ご自身の重要な関心事としておありのように思えます。それで、そういう点で先生のご批判もいただき、またお考えも伺わさせていただければと思つておるわけです。

註

(1) 阿部正雄「非仏非魔——宗教的自覚における魔の問題」(玉城康四郎編『仏教の比較思想的的研究』東京大学出版会刊所収)。

(2) 学道道場は、京大仏教青年会を改組し久松真一先生を中心に昭和十九年四月に結成された求道的な学生の集りで、坐禅、論究、相互参究(僧堂の参禅にあたる)を行い、その後FAS協会と改称。真実の自己の自覚より世界と歴史の甦新を願う活動を行っている。

二、魔の問題の頂点と広がり

西谷 このあいだ、お書きになった論文を読んで、いろいろな問題を提起されているので、考えさせられました。いまのお話では、問題のいちばん骨子のところ、つ

まり仏と魔とか、更には非仏非魔とかいわれる事柄のいちばん根本の、原理的なところを話されたわけですね。山でいうと頂上に当るところでしょう。それが、もちろん最も重要な点ですが、同時に仏といふ魔といつても、それは山の全体に関係している問題で、そこには非常に広い裾野がある、というのは、「世界」の全体ということでもいいし、ありとあらゆる「事物」といっていいが、そういうものと連関している問題ですね。仏とか魔とか、西洋だと神とか悪魔とかという問題は、たとえば自然の世界、自然の限りなく多様な事実とか現象とか、それから歴史上の世界とそこでの諸事実・諸現象とか、すべてそういうことのうちに貫徹しているものと考えられている。神も悪魔も、世界のあらゆるところに顔を出している。それも、大抵の場合は覆面してですが、時には、今お話しになったように、魔が仏の面をかぶってということも起こるし、時には仏が魔の面をかぶってということもないとは限らない。たとえば禅の非仏非魔というのは、仏にも魔にも自由に出入するということのようなことから、そういうこともないとは限らない。ともかく、

人間は自然や歴史の世界を背景にしている、仏も魔もその世界と連関して居り、その世界全体が人間の内面に畳み込まれているわけです。

ところで現代では、ニーチェの言葉でいえば「神は死んだ」ということで、神が世界の全体を支配する絶対的な力というものを失ったというか、そういう絶対者としての「神」というものが考えられなくなったという状況があつて、それがニヒリズムといわれている。これはキリスト教ばかりではなく、ほかのあらゆる宗教の上にものしかかっている問題ですね。儒教なんかの場合なら「天」、老荘だと「道」というものがなにか宗教的な性格をもつて考えられていたわけですが、近ごろでは「天」といつてももうひとつ実感が湧かない。そういう状況が現代あるわけだけでも、それにしても、そういう宗教的な絶対性の原理の欠落というか、絶対的な根元の日蝕状態といわれるようなこと自身が、やはり神とか仏とか天とかいわれたものの裏返しのようなことで、ニヒリズムの問題というのは、神や仏ということの前提なしでは現われてこない。そういう問題ですから、これは反宗教

的とか宗教否定とかいいながら、やはり宗教に含まれている根元的な、原理的なところでの対決で、たとえば「世界」というものの根元には何があるか、その世界のうちに生存する人間の、乃至は自己の存在の意味はどこにあるかというような問題に係わったものです。その意味でニヒリズムも問題の広さとか深さということでは、宗教と共通ですね。

そういう非常に広い裾野をもった、あらゆる問題に係わっているという一面が、今の問題にはある。それで、あなたのいわれた対立原理としての、仏に対する魔、キリスト教の場合でしたら、神に対立するデヴィルとか、サタンとかいうものについても、同じことがいえるわけですね。やはり問題が全面的に出てくるということですね。

そこで魔ということが問題になる場合、あなたが取り上げられたのは、宗教プロパシーの領域、しかもいちばん頂点的なところでの仏と魔という形においてだといえますが、そのところで魔という問題を非常に掘り下げ、突きつめられた結果打ち出されてきた事柄、さっきのお

話にあったような事柄ですね、それが今いった広い裾野のいろいろな領域をなすところへどういう形で波及していくのかという、そういう問題が一つあると思います。現代では悪魔とか魔ということは科学の領域では全然問題にならない。自然科学の諸分野でも、社会的・歴史的な諸科学の領域でも問題にならないわけです。時々その言葉が比喩的に使われることはあつても、本来の実証的な思考の文脈のなかでは、その言葉は無意味になっている。その影響で、一般の人も、昔の人間が信じたようには悪魔や魔の实在を信じてはいない。しかし文学の領域とか社会評論や政治評論の領域などになると、その言葉は既に象徴的な意味合いを含んで来て、ずいぶん頻繁に使われています。イデオロギー的思考などでは、敵方のすること・なすことが悪魔の仕業と映るらしい。実際にまた、現代政治の領域では戦争や紛争やテロなんかには、「魔」や「悪魔」が象徴的な意味をもってくるようなところがあるし、一般社会の世相のなかにも、そんなような現象がいくらかでも発生しているわけです。そのほか、全く別な方面ですが、現代流行のオツカルティズム

に乗って、「魔」がいろいろなところに、いろいろな形で隠頭しつつある。特に精神分析というか精神医学というか、とにかくその学の対象になる広い分野では、「魔」という言葉の象徴力は無視できないのではないかと思えます。要するに、現代世界の政治・社会、倫理や心理などのいろいろなところに「魔」が顔を出している。神や仏の影が薄くなるというか、日蝕や月蝕の状態になるというのに比例して、魔の影が濃くなってきたという感じがします。

しかも、それだけではない。さっき科学の領域では魔というものは問題にならないといったその科学のことですが、そういう科学の立場自身が、その立場を一部分として含む全体の立場から見ると、根本のところでは「魔」の問題と絡み合っているといえなくはない。たとえば核兵器のそもそもの出現やその進歩・発達には自然科学が原動力になっている。その発達が推進されて行く根本には「魔」的としかいい様のない暗い力が感ぜられる。自然科学の本質が自然界の真理を探究するところにある限り、科学それ自身はその「魔」には係わりないとはいえない。

神の楽園から追放されたという説話の問題と、肩を比べるくらい重要な問題です。

いま話したことは、魔の問題としては、裾野の広がった辺りの事柄です。しかし、さっきのお話にあった魔についての新しい問題提起が、根本的であればあるほど、他方では、それが裾野の問題にまで波及させられた場合、どういうことになるのか、現実のいろいろな問題がその新しい視野のもとでどう考えられてくるかといったような、そういう方向のペースペイクティヴも同時に必要かと思えます。それによって、あなたの出された思想の意味も一層はつきりしてくるということがあるんじゃないか。そういうことを一つ感じました。

三、キリスト教の悪魔と仏教の魔

西谷 それから、ほかにもいろんな問題が含まれていると思いますが、お話のなかに出て来た仏教の宗教的な性格とキリスト教のそれとの違い、タイプの違い……。

阿部 悟りと信仰というふうな……。

西谷 それは仏教のなかで禅宗と真宗とで代表される

ますが、科学者自身は本質的に、つまり人間である限り、それとの係わりのうちにあり、魔の問題には与かり知らぬと済ましていることは許されない。科学する人間である限り本質的に係わりないが、科学する人間である限り本質的に係わっている。そして「科学する」という時の科学的思考の自発自展的な活動と、科学する「人間」とは切り離せないから、この両面は一つの自己矛盾です。科学するという純粋活動は、たとえば核兵器の成立における根本の力として「矛」の面とすれば、科学者という人間は「盾」の面です。仏にも魔にも本来係わりない科学が、人間を自己矛盾に陥れるという、まさにその点が「魔」の現われであるわけです。核兵器もそうですが、それと同じように人類の破壊にもなるかも知れぬ危機的なものが、「生命科学」の発展にも潜んでいるといわれます。それらは、魔が科学という現代の花形を自分の覆面にした、その最も現代的な現われと見ることも出来ます。

科学と結びついたこの問題は、旧約聖書にあるアダムの「原罪」、つまりサタンに誘惑されたアダムとイヴが

ような違いですが、それをもっと広く見ると仏教とキリスト教との間でも考えられるような問題ですね。いままでの歴史のなかでそれを問題にすると複雑で面倒なことになります。さし当り魔の問題との連関で考えると、魔という問題は、とにかく善と悪ということに結びついているわけですが、伝統的なキリスト教はその点で非常にはっきりしていて、善なる神に対する悪魔ということ、善と悪とを分けると魔は悪のほうを代表している。もちろん仏教にだってそういう面があって、魔というのは大抵の場合、仏と対立的なものと思われている。そしてやはり善悪という対立がそれに結びついている。しかし仏魔の対立と善悪の対立とは、キリスト教のように本質的に、原理的な意味で結びついているのとは違う……。

阿部 単に倫理的な意味合いのみでもないということですね。

西谷 仏教だけでなく、一般に東洋ではそういう傾向があるんじゃないですか。たとえば魔にも、悪い魔もあるが善い魔もあるというふうな。

阿部 なるほど、そうですね。

西谷 あれは神変大菩薩でしたか、修験道の……。

阿部 聖護院などの修験道の……。

西谷 つまり、役の行者ですね。あの役の行者には、お供にふたりの小さい鬼がいる。その「鬼」というのもキリスト教のサタンとかデヴィルとかと性格がすっかり違っている感じがです。なんとなくいたずらっ子がわるさをするというような、どこか無邪気なところがある。鬼という言葉では言われていますけれども、その意味が大分ちがう。従って魔という言葉で象徴されるものも大分違った性格のものです。

阿部 天邪鬼あまのじやくみたいなものですね。

西谷 そう。だから魔ということについてのセンスが東洋では違う一面がある。西洋の世界でも、あなたの論文にも出て来た *das Dämonische* という場合のデーモン、その源になるギリシアのダイモニオンは、倫理的な意味での悪の性格はないですね。もともとギリシアの世界にはそういう意味の悪魔はない。ただ何となく超人間的な力をもったもの、人間の知識や行動や技術などの能

力が先天的に含んでいる枠を超えたような能力をもったもの、つまり知識の規則としての論理とか、行為の規則である倫理とかに拘束されない力、東洋でいう「神通力」をもった存在、それがデーモンで、それは真とか偽とか、善とか悪とかの差別を超えている。或いはその差別以前で未分ですが、しかしそれだから悪いということではない。むしろニュートラルな、中性的な性格ですね。そういう意味のデーモンニッシュというものがあって、それも魔ということになる。

要するに、魔という言葉にはそういう複雑さがありますね。仏教で魔という場合、根本にはそういう性格がある。たとえば仏教で魔道と外道というでしょう。これは仏教からいうと結びついている。それで魔外として一緒に問題にしたわけですね。外道というのは仏教以外の教えで、それが仏教からいうと悪い偽りの道だということになる。しかし、それだから外道は悪魔の教えだ、とまで考えたかどうか。

阿部 「魔界外道も障礙することなし」などといいま

西谷 キリスト教では外道は *paganism* 異教ですね。

異教というのはやはり間違った悪い教えなんです、それがキリスト教では一直線に悪魔にまで行く傾向がある。キリスト教の信仰に熱心になればなるほどそうなる。キリスト教の内部で正統の信仰から外れた異信仰、つまり異端（ヘテロドクシー）は、なおさら憎まれて、悪魔と結びつけられる。仏教では異教はもとより、同じ仏教内の異端でも悪魔ということまでは行かんと思えますね。魔ということまでは行くとしても。だから、異端者を広場で焚き殺したりしない。魔女狩りもないし、インカを絶滅したりすることもない。

阿部 裁きの意味での悪魔とはいわぬ……。

西谷 魔とはいっても、悪魔とまではいわない。いつも根本に寛容さがある。キリスト教だと、聖書なんかを見て、血を見るところまで行くというきつさを感じられますが、仏教では魔外を教えて仏教に帰せしめるという方に重点が置かれている。その辺についてもやはり魔というものについての感じ方が違う。そういう一種のニュアンスの違いみたいなことも、問題にしていくべきじ

やないかと思えますね。

阿部 それは大いにありますね。

西谷 そういう意味で、仏と魔という対立概念に立てられたときに、魔というのは、あなたの場合どういう性格をおもに考えられたか。むつかしい面倒な問題だから何ですけども。

阿部 この論文でも悪魔と魔を多少使い分けたのですけれども、それを十分はつきりとさせなかつたのです。悪魔といえ、どうしても神に対する悪魔ということになつて形の上ではキリスト教的な悪魔をさすことになり、これに対して魔といえはいきおい仏に対する魔ということになつて形の上では仏教的な魔をさすことになります。このような使い分けは単に形の上だけではなく、あとで話す機会があるかと思いますが、内容的にも重要なながいをさすわけで、それをはつきりさせることが大切なのですが、この論文では、一応仏教とキリスト教をふまえながら、問題を広く人間の宗教的自覚の問題として捉えようとしたので、いつも形式的に仏教の場合、キリスト教の場合というふうに分けることが出来な

い場合がしばしばあり、そのような場合には、はっきりと使い分けることに、むしろ困難を感じたわけです。けれども、もちろんおっしゃる通りに、魔とは何をさすのか、その性格をはっきりさせることは、むづかしくても是非必要なことです。

西谷 あなたの問題とはちよつとずれた問題かも知れませんが。だけでも、魔という問題を置いていくと、結局そういう……。

阿部 それは私も感じておりましてね。

西谷 たとえばさっきのお話にあったような、仏の信仰ということであっても、それは実は魔を行ずることだといわれた場合、魔というものの性格如何によつて、いわれた言葉の響きがちがつてくるということはありますね。響きといったのは、仏とか信仰とか、魔とか行ずるとかという一々言葉のつかい方の問題だけでなく、その話全体の意味をどう理解したらいいかという問題です。それからまた、さっきいった裾野の拡がりにまで波及する形で問題にする時、魔なら魔という概念の意味内容の違いが大きな問題になってくる。

西谷 今じつは吉田山を越えてここに来たんですよ。

そしたらこの月の四日ですか、吉田神社の節分がはじまるので、もう売店なんかをさかんにつくっている。吉田神社は京都の節分では一番中心の神社で、百万人くらい人出がある。あの祭りの中心は鬼やらいで、だからなにか赤鬼・青鬼が出てきてあばれるのを、武者の格好をした者が追い払うという儀式ですね。これはほかの神社でも行います。あそこに出てくるのは鬼ですね。さっき言った役えんの行者のお供も鬼です。

阿部 善魔という言葉もありますね。

西谷 あります。魔ともいえるんじゃないかな。神社のお札なんかも魔除けのお札といえますね。ところが、あれに似た祭が西洋にもあるんです。写真で見ただけです、スイスの何とかいう村で、その時は観光地になるらしい。出てくるのが日本の鬼と似ているのでびっくりしました。あれは多分キリスト教の以前の……。

阿部 ゲルマン的なもの……。

西谷 ゲルマン的かケルト的か、とにかくそういう時代のものですね。そういう古い時期のものでしかも現在

まだいろいろな問題があると思いますが、かりに今いった二つの点についてみてみました。一つは魔の問題を見る視野について、もう一つは魔という言葉の意味についてです。

四、魔の問題の内面性と理性の自律

阿部 最初におっしゃったことですね、もつと広い裾野が神と悪魔という問題にあるのではないかと。このと、これは私もまったくそうだと思うのです。人間の宗教の歴史を見ますと、未開人の宗教でも必ず何か神的なものと魔的なものが出てきますし、神話のなかでも必ずそういう二つのものが出てくる。日本の民俗信仰なんかでも、神さまと鬼やナマハゲのようなものが出てくるし、それから神信心のほかに魔除けというようなこともついてまわっているわけですから、おっしゃる通りに、日常生活から社会生活、あるいは政治の面でも、あらゆる面で、神と悪魔が入り混じってといいますか、絡み合っているの、何か魔的なものが出てこない場面はむしろないといつていいほどですね。

なお日常生活と結びついているものがたくさんある。

阿部 日常的な生活から庶民生活の隅々まで、そういう神的なものと魔的なものと両方がしみ込んでいるということは、よく気をつけてみれば、たしかにあると思います。

西谷 追儼式の鬼、怨霊、祟りの神、もののけ……。

阿部 そういう非常に広い裾野をもつて、何か魔的なものが人間生活のあらゆる面にかかわっているということは、たしかにあると思います。そしてそういう場合に、悪魔とかデーモンのものは、なにか外にある悪い存在で、一種の人格性というか、何かそういうものをもつたものとして、人間に働きかけてくる。神さまを押しつけて人間を悪いほうへひっぱって行こうという形のものになっていくと思うのですが……。キリスト教のサタンとかデビルというようなものも、聖書なんかを見ると、やはりなにかわれわれの外にあってうごめいているようなものとして描かれていて、いわば神話的に表象されています。それから未開宗教や民間宗教でいわれている悪魔的なもの、たしかにそういう形のもので、悪魔

に取りつかれるとか、魅入^{みいり}られるとか、というふうにいいますね。現在でもまだ悪魔的なものは何か外にあるものとされていると思うのです。しかしそういう外に存在する悪魔的なものが出てくる源は何かということも、問題だと思ふのですね。やはりそういうものの源は、結局われわれの内面の内深くにあるのであって、それが外に投射されて、悪霊とか鬼とか悪魔とかいう形で表象されてきていると思われまふ。ですから、悪霊や悪魔をそういうものの出てくる源としてのわれわれの心のなかの問題としてとらえるならば、いくら時代が変わり科学が進歩しても、悪魔の問題は決してなくならないと思うのです。

私がこういう悪魔の問題にぶち当たったのは、自分自身のそういう内面の、宗教的自覚の問題としてですが、そこからいいますと、聖書や仏教に書いてあったり、あるいは未開宗教や民間信仰でいわれている魔の問題が、逆にそういう内の角度から理解ができるのではないかと思うのです。ですから、裾野と頂点とか、広い全体とその中心とかいう場合に、おっしゃるようにこの両面はどう

しても切り離すことはできないので、やはり広いひろがりをも十分に見届けなければならぬと思います。ただ、さまざまな形の魔の出所は、われわれの心の内面にあるのではないかということ、それからもう一つは、今日までの宗教の歴史を顧みるというだけではなしに、現在および今後の人間の宗教的な自覚の問題として考える必要があるということ、少なくともこの二つの点が私には大切に思われるわけなんです。

この第二の点は、この論文の終わりのほうにちょっと書きましたけれども、近代以後のわれわれにとって理性、自律、ということがどうしても問題になってきますので、今日、仏教的な信仰とか悟りとか、あるいはキリスト教的な信仰とかいっても、やはりカントなどがはつきりと基礎づけたような理性のアウトノミーということを除く外には、われわれの問題になりえないところがあると思うのです。そういう理性の自律ということとの対決において、信仰とか悟りとかを問題にした場合に、いままでならあらわに出てこなかったような問題が、あらわに表面に出てくるということは避けられないのじやな

いか。その場合にいちばんつきつめたところでは、自律的な理性との絡み合いにおいて、神信仰ないしは空を悟るということが貫徹されようとする時、魔の問題が出てくるのではないかと思うのです。そういう現代から今後に向かつてのわれわれの宗教的自覚の問題という意味で、魔の問題が避けられない一つの重要な問題になってくるんじゃないか。そのひろがりということも、おっしゃるような日常生活の万般にまでそういう問題がずっと浸透しているということも考えなければならぬと思うのですが、現代に生きる人間としてわれわれが自らの宗教的自覚を深めていこうとする時、自律的な理性との対決を通して魔の問題は何びとも避けることができないという意味では一つの普遍性をもった問題ではないかと思うのです。つまり宗教における魔の問題というのは、なにも一つの特異な問題とか、あるいは私だけの問題とかいうものではない。むしろ私としては非常に普遍性のある問題だということがいいわけなのです。

五、中心から周辺へ、周辺から中心へ

西谷 それはそうだと思います。だから、さつきはかりに裾野といいましたが、べつに頂きと切り離す必要はない。裾野のいろんな問題は、結局、帰するところはわれわれの内心の問題である。各自に自己自身の実存的な問題ともいえます。また、その内心の問題となる時に、自己と神、仏、悪魔というもののとの関係が初めて宗教という領域の問題という意味をもってくる。そこが問題の中心で、周辺に起こる問題はすべてその中心から放射されてくる。中心の投影である、と見ることができるわけなんです。そういう見方というのは、いろいろ多くの問題を根本へ集中し、深く透視しようということですが、それと同時に、その見方と切り離せないけれども、逆の方向からの見方というか、いろんな問題はみな外の世界から起こってきて中心へ向かっているという一面もあると思うんです。問題は絶えずあらたに起こるいろんな現象、その事々物々のなかにある。魔という問題なら、原始未開の時代から、科学の発達しない以前に、人間が自然界の圧力のもとで、自然の暴力とでもいうようなものに絶えず曝^{ばく}らされて生きていたということが背景にありま

すね。自然の恩恵ということも、もちろんあります。ともかく自然現象の背後に、自分の手の届かないところに、自分を超えた強大な力があって、それが日月星辰や地下水火風を通して、善であつたり悪であつたりして、自分達の生活を支配してくるというようなことですね。

阿部 恵みを与えるものと災いを与えるものがある……。

西谷 外の世界の自然現象をそういうふうに見る。これは一つの自然解釈ですけれども、その解釈が同時に人間の自己解釈ですね。獲物がたくさんとれたとか、病氣になったとか、その他何でもいいわけです、すべて、よい場合でもわるい場合でも、なにか或るかかれた力との連関のなかで解釈する。これは人間の自覚の形態で、自己の存在を解釈することです。だから結局、あなたが中心のところの問題にするといわれたことも、裏から見ると、同時に世界という広い場の只中で、あらゆるもののつながりのなかで……。

阿部 それらとのつながりを離れてはいない。

西谷 中心から周辺への放射という方向と、外から内

への影響、周辺からの響きが中心に来るという方向とが一つになっている。

そういうことが一番はつきり現われているのは、現代のいろいろな問題のうちにはないかと思えます。例えばあなたのいわれた理性の自律という問題、これは現代の問題というよりも近世、又は近代の問題といふべきかと思いますが、しかしもちろん現代にまでつながっている問題です。理性の自律ということのカントがいい出したのは、実践哲学の領域で実践的理性ということに關してだったわけですが、その背後では、ニュートンに代表される自然科学というものの世界像、乃至は世界観ということが問題になっていた。自然科学的な世界の因果必然性と人間の本質に属する「自由」との間の問題ですね。そして実践哲学の領域の内部でも、人間のなかの自然な本性から出る傾向、心が自然にそっちへ引かれて傾いて行く方向がいつもある。カントのいうナイグングがある。人間の欲求がその傾向性に引かれて、その時その時の好き勝手な方向に動く。そしてその恣意を人間は自由だと思ひ込んでいる。その迷蒙を破って、人間が自分

を人格として自覚する道が実践理性の自律ということだったわけです。

これは倫理の領域のことですが、しかしその背景には外の自然の世界に関する問題がある。世界の問題はカントでは、自然科学との関係から自然認識の問題だったわけで、理論的理性の領域での人間の理性の自己省察ということだった。それは人間の主体的な自覚というような道として出されたといえます。いうまでもなく、それは一方では、自然現象として経験に与えられた対象を認識し得るという可能性の先験的な根拠を究明する意義をも含んでいた、といわれるわけです。その純粹理性の批判ということは、他方では、それまでの形而上学のように、超経験的な、そして宗教と共通な立場から、神というようなものとの関係のうちで世界を捉えようとする理性の越権に対する批判でもあった。神とか靈魂それ自体の不死なる本質とか、自由それ自体すらも、理論的な認識や実践的な認識の対象にはなりえない。しかしただ実践理性の立場からはその可能性が確実性をもって保証されるとされた。つまり、カントでは理性の問題には、自

然科学の世界像、それも自由を排除した機械観的な必然性の世界と、人間の自由と信仰という宗教的な立場との確保という複雑な問題群が背景にあるわけですね。こんなことは、長い間カントを研究されたあなたに改めていうこともないのですが、ただ現在に問題とされている神と悪魔或いは魔という問題に、理性の自律ということが絡んでいるといわれる。その理性の自律ということが頂上の問題であると同時に広い裾野の問題でもあるのではないか、と思ったので引合いに出したのです。

現代では、あなたの場合もそうだと思いますが、理性の自律というものは、カントにみるように、全体的な問題を解く鍵ではなくって、問題全体の一部になっているわけです。もちろん、問題の最も重要な、不可欠な一契機ということですが。現代ではもっと端的には、たとえばマルキシズムですね。存在が意識を限定するという立場だから、倫理のように人間の道徳意識の上で善とか悪とかいって、人間は自分が悪いんだとか、自分の心の問題だと見なししているけれども、じつはこれは意識の基礎にある存在の問題だ。「存在」というのは結局、生産

力とか生産関係とかにおける物質上の事柄で、人間の社会関係に反映された形では資本と労働ということですね。もっと具体的にいえばブルジョアとプロレタリアという階級的関係で、これは社会構造の問題で、現代なら、近世以来の自由主義と資本主義、他方では社会主義と共産主義で、政治的経済的な問題です。だから善とか悪とかいっても、それは倫理や宗教なんかの問題ではない。人間の心とか主体といっても、本当の主体は（マルキシズムでは一般にはそういいませんが）意識的主体の基底にある「物質」である。「歴史的物質」であるということになる。こういう社会観や歴史観をもった「科学的」な唯物論は、自然科学が昔からの自然学（*physica*）の近代版であるように、昔からある唯物論哲学の近代版で、現代でも非常に強い影響力をもった考え方でしよう。それは宗教否定の無神論だから、仏も魔も問題にしない。しないけれども、社会が変革されれば、人間の意識も変革されて、倫理は社会正義として実現され、旧い倫理の基礎であった宗教は自然消滅するというわけだ。

もちろん、この立場も、宗教の側から見れば、さつき

科学一般についていったような意味で、現代における「魔」の新しい現われとして問題になるということは可能でしょう。そうなるとやはり内の問題と切り離せない。

阿部 それはもちろんそうですね。科学の問題でも、テクノロジーの問題でも、それから政治機構とか権力の問題でも、みな外の拡がりや内へのかかわりとの切り離せないところで問題になってきますね。

西谷 マルキシズムも現代における「魔」の問題の一つということになります。

阿部 さきほど、理性の自律ということが、頂上の問題であると同時に広い裾野の問題でもあるというお話がありました。この理性の自律ということをお話に即して考えてみますと、こういう問題が出てくるのではないかと思います。仏教でよく分別はいけない、無分別智にめざめなければいけないといえますね。その場合仏教は分別知を頭から否定されるべきものと考えて、そのものも積極的な意味や役割を十分考えていない。理性の自律というのは、ある意味では純粹分別知の立場ともいえ

るかと思いますが、そういうものを全く問題にしないところ

で無分別智がいわれている。しかしそれでは真の無分別智とはいえない。しかし自律的理性との対決に入った時、従来真とされていた無分別智は真のそれとはいえないということが明らかになってきます。ここに真に絶対でないものを絶対とするという「魔」の問題が入ってくると思います。これをもし頂上の問題といえ、裾野

の将来、人間の将来に深い係わりのある事柄です。阿部 たしかにそうですね。外の問題自身がやはり時代的に非常に変わってきていますし、ある意味では外の方が強まっており、状況は前よりはるかに複雑なものになっている。

キリスト教では悪魔はもと天使であったといえます

ね。しかも三大天使の一人であったルチファーが、神の位を篡奪しようとして墮落して悪魔になったといわれますね。悪魔とか、ダス・デモーニッシュといわれるものの本質は、元来真の絶対でないものが自らを絶対の地位に高めようとするところにある。このことは先生のおっしゃる頂上の問題——いまの場合は天使の墮落としての悪魔——から裾野の問題まで相通ずるところがあると思われま

す。テイリツヒなどもナシヨナリズムやコミュニズム、あるいは科学的なヒューマニズムも、それが自らを絶対化する時、デモーニッシュな性格をもってくるといっているのは、裾野の問題としてのそれだといえるのではないかと思います。

西谷 マルキシズムも前世紀に成立したもので、現在

では過去のものというのですが、未来に尾を引いている問題でもあって、宗教にとって外の問題ながら、人類

六、魔のキャラクター

西谷 あなたの「非仏非魔」といわれる段階では、やはりこれまでの伝統的な宗教というものから一步はみ出ているけれども、それだけ一層、宗教なんかを問題にしないような現代の状況と結びついてくると思いますね。

それで、魔の主體的な自覚とさっきいわれた場合の魔というのは、どういう性格のものと考えたら……。

阿部 私としては、魔の存在というようなことではなく、どこまでも魔の自覚ということで問題にしたいと思うのです。その場合、魔の自覚ということではどうもびつたりとこない。どうしても魔の自覚ということになるのです。悪魔というと、神と悪魔という形になり、その場合、悪魔はさっきおっしゃったように、神にたいする一つの否定原理であり、対抗原理であり、しかもキリスト教の場合ですと、神自身は非常に倫理的・宗教的な性格が強いですね、「義なる神」ということがありますから。そこで悪魔のほうも、さっきのお話のように、善悪の悪のほうの最大級のものという形になってくるので、そう

いう倫理的な次元を脱却した、より存在論的な性格をおびた魔とはかなり性格がちがってきます。

それともう一つの点は、キリスト教的な世界では、悪魔は神の対抗原理ではありますが、最終的には神によって克服されるべきものという前提がありますね。窮極的には神によって克服される。ですから両者の間に非常な緊張関係がありますが、そこには神の優位ということが一貫して根柢にある。それに対して仏と魔という場合には、必ずしも善悪の倫理的な次元、あるいはその延長線上のものというよりも、むしろ存在論的な意味合いが濃く、生死とか、有無とか、迷悟とか、空とか、即とかいう問題がからみついていきます。また必ずしも仏によって魔が一方的に克服されるべきものというふうには考えられていない。むしろ仏魔同体、仏魔未分というようなところがどこかずつとあって、問題がより深く把握されていると思うのです。

それで、仏の裏にはいつも魔がひそんでいる。その意味では、魔は仏の反対原理ではあるのですが、神が悪魔に優位しており、神と悪魔の対立は最終的には絶対の神

によって超えられるというのではなく、仏と魔が同体未分であるということ自体を対自的に自覚し、それを超えて仏に非ず魔に非ずという絶対無の立場に徹するためには、神が優越するキリスト教的な悪魔の自覚ではなく、仏魔同体をふまえた仏教的な魔の自覚を、不可欠の契機とするわけです。

私が魔の自覚といっている時には、キリスト教とか、仏教とかいう枠にとられない人間の宗教的自覚の問題としていっているのですが、それはどちらかというとキリスト教的な意味での悪魔ではなく、仏教的な意味での魔になってくると思います。

西谷 つまり、さっきいったニュートラルな性格ですね。もちろんそれでも、仏との対性ということはあるわけですね。キリスト教の「神」と仏教の「仏」いうものの間に、絶対者としての性格の相違があるわけだから、その相違が魔の上にも反映しているとも考えられますね。仏教では仏と魔は善と悪として割り切ってしまうことも出来ない理由がいろいろある。その点で『臨濟録』なんかの場合は典型的です。しかし仏教全体としてみる

と、たとえば親鸞の場合でも、やはり地獄というものが背後にありますね。仏教で地獄というのをどう考えたらいいのか、はつきりわからないが、源信などもダンテの「地獄篇」に似ていて、悪魔的な性格という感じがいくらかある。

仏教には別に、阿修羅というのがありますね。阿修羅というのはもとはイランの宗教の神の名前でしようね。それがインドへ入った時、異教の神だから、あばれん坊の魔という程度で悪者にされたのでしようね。似たような事はどの宗教にもあるわけですが、しかし阿修羅というのは戦争ばかりやっているけれども、悪魔とはちがう。

阿部 ちがいますね。阿修羅には二つ性格があって、真理を追究する若者というのと、戦いの神というのがあるようです。奈良の興福寺にある阿修羅の像なんかは、求道的な、つまり真理追究者というほうのシンボルらしいですが、同時にまた手が六本か八本かあって、神特に帝釈天と戦う者だといわれていますね。

西谷 オリエントといわれる地域は古くから、たくさ

んの民族が接触した場だから、神々も戦闘的だったのかも知れませんか。ヘブライ人の宗教がそうで、その後のキリスト教でも古くから「戦う教会」ということがいわれ、凱歌をあげる教会ということもいわれた。

阿部 チャーチ・ミリタントですね。

西谷 それはともかく、仏教でも地獄というのが六道のなかでいちばんすごいけれども、キリスト教だとサタンというのが大魔王で、ダンテの「地獄篇」でも地獄のいちばん深いところにおって地獄に君臨しているのに、仏教では大魔王みたいな観念があるのかどうか。提婆達多みたいに釈尊に敵対して地獄に落ちた罪人や、獄卒としての鬼はたくさんいるらしいから、大魔王がいてもいい筈だが、大王はむしろ閻魔大王で、これは裁き、審判を司るだけですね。

阿部 やはり善悪というか、道徳というものの自体の考え方がキリスト教と仏教とはちがいますね。仏教では善悪が相対化されていますね。極悪人で地獄におちても、永遠のパニッシュメント（罰）ではなく、なお何か救われる余地がある。そういう考え方が、仏教の地獄や

閻魔のイメージに影響していると思いますね。

西谷 それにしても、真宗などの浄土教になると罪業という概念が強いから、地獄に落ちるということは若干キリスト教と共通のような感じも出てくる。その点は禅宗などが専ら悟りということの問題にして、「天堂」や「地獄」を窮極的なものと認めないのと、基本的な違いが出てくる。しかし、禅宗のほうでも魔ということを問題にしたり、地獄というものを問題にしたりしていることは、よくありますけどね。

阿部 私これも先生にお伺いしたいんですが、原始仏典ではマールという悪魔がさかんに出てきますね。お釈迦さんの成道のときとか、成道以後でも、しばしばお釈迦さんに現われている。それから涅槃経などの大乘仏典、そのほか、天台とか禅ではさかんに魔が出てきますね。ところが浄土教関係の經典にはほとんど魔という問題が出てこないのです。たとえば親鸞の場合でも魔界外道という言葉は出てくるけれども、それから『教行信証』の「化身土の巻」のほうにちよつと魔の問題が出てきますが、それは非常に周延なこと、そのかわり罪

という問題は「罪業深重」ということで、非常に強烈に出てきますね。浄土教では、ほかの仏教とちがって魔の問題がそれほど明確には出てきていないのです。むしろ罪ということに重点がおかれていて、それまでの仏教で魔が問題にされたような宗教的基盤が変わってきているところがあるのではないかと思うのです。それだけに仏教一般というか、原始仏教や天台や禅の場合の魔の理解というものは、罪とか、それにかかわる倫理的な善悪ということと一応別個の角度から、つまりもつと宇宙論的、存在論的な基盤の上で出てきているのではないかと思うのですが。

七、悪と罪と魔

阿部 それから悪と罪と魔というのは、それぞれその成り立つディメンジョン（次元）がちがうのじゃないか。もちろん互いにつながりはありますけれども、しかし同じ次元で理解することは出来ないと思うのです。また、悪と罪と魔の間には、単なる程度の違いでなしに、質的な違いがあるのではないか。その質的な違いを明確にし

ないと、いろいろな問題がはつきりつかめないのではないかと思います。

たとえば善悪の区別、対立ということは、人間対人間という倫理・道徳の立場だけでも十分成り立つ問題だと思えますが、宗教的な意味での罪の問題は倫理道徳の立場だけでは出てこないと思います。罪の問題は、神とか仏とかいう、超越者とかかわりなしには出てこないの、人間対人間ではなく、人間対神という次元で初めて出てくる問題だと思えます。ですから、かりに善悪対立の根もとにある、カントなんかという根源悪というような問題も、神との関係に入ることなしにいわれている限りは、なお罪の問題とは次元を異にしているといわねばならないのではないか。非常に鋭い良心の立場で、自分の行う善の裏にもつねに悪がひそんでいるとして根源悪を深く自覚する場合でも、それは神をはなれても成り立つと思うのです。けれども、その根源悪がさらに罪として自覚されるには、そういう良心の立場がさらに神の光のなかで照らされるとか、その人が仏とかかわりに入るとか、いうことがなければならぬ。しかしこの罪の

日本語の神という概念でもそうですけれども、すべて神話に出てくる神は、山の神、河の神、日月星辰、地水火風、その他あらゆる種類の「もの」が神になるし、鍛冶の神、音楽の神などあらゆる技術・芸術の神がある。何の神は無数にある。また人間の英雄も死後に神として祭られる。要するに、神とか「神的なもの」とかいう概念は非常に広くて、いわゆる汎神論的です。この神話的な神観念は、古代の進歩した文化の国、インドや中国、ギリシアやローマその他では普通だったといえます。そしてこういう神話的な神観念の次元で、その神との連関のもとに、悪とか罪とか魔とかが考えられていた。例えば罪悪ならば日本神道の「まがつみ」というような意味合いで、また魔ならば、前にいったダイモニオンというようなのがその例です。

そういう神話の世界は、その後に見られた知性の目醒め、或いは啓蒙された「理性」という立場からすれば、俗信とか迷信とかといわれたわけですが、私はその見方には賛成しません。むしろブルトマンが神話の「実存論的解釈」を通しての「非神話化」とよんだような方向で

解釈すべきだと考えていますが、ここではその議論には立ち入ることは出来ない。ただ、その知性の目醒めによって、神話の世界は論理と倫理を含んだ広い意味での哲学が支配する世界に移行して、新しい次元に進む。これはギリシアでもインドや中国でも起こったことで、人間の新しい自覚です。その次元では理性の立場から真偽や善悪の明晰判明な規定がだんだん為されて来て、神の概念もそれを踏まえたものになって行きます。そこから見て、神話の世界での神観念や悪、罪、魔の観念は規範にはならない。その意味で俗信とか迷信とかともいわれてくるわけです。この転換は決定的で、西洋ではソクラテスやプラトンから始まるわけですが、そこで始まる哲学の立場は、現代に到るまで続いています。さっきのお話には、カントのことが出て来ましたが、カントの宗教論は、理性の限界内での宗教の論で、根本悪は語られていますが、原罪は出てこないし、サタンも出て来ない。哲学ではそれは神話で理性の立場での規範にならない。それを規範にするのはキリスト教の神学で、キリスト教の信仰箇条（宗教としてのドグマ）を基礎として前提した上

自覚というところでは、まだ魔という問題は出てこないと思うのです。その罪が救われるところ、罪が恩寵や慈悲によって、救いに転ぜられて、パウロでいえば、罪のいや増すところ恵みもいや増すという、そういう神の立場を信ずる信仰を通して神と一つになるという所まで来たときに、初めて、そのような神に対抗するものとしての悪魔、あるいは魔というものが、ほんとうの意味で出てくるのだと思います。つまり人間対神という次元をこえたところで初めて悪魔とか魔という問題が出てくる。悪も罪も魔も、すべて否定原理であるということでは共通していても、それが出てくる次元ははっきり区別すべきところがあるのではないかと思うんです。

ですから、悪魔は決して最大の悪人ということではなくて、最大の悪人をもはるかに超えたようなもの、また最大の罪人をも超えたような、それとは別次元に現われるもので、悪人や罪人といわれるものとは別個の意味を、悪魔はもっているといわねばならないと思うのです。ですから罪人をこそ救うという神が出てくる次元に至ってはじめて、ほんとうの意味で悪魔の問題が出てく

るのではないかと思うのです。そういう点はどういうふうにお考えになりますか。

西谷 だから、そのことにはさっきいった「魔」という概念についての問題が絡まっているわけですね。先ず、悪と罪と魔の次元の違いといわれたことから考えてみます。

たとえば「神」という観念の場合でもそうだと思いますけれども、問題の頂点へいくとキリスト教でいう神の観念などが内容的に問題になってくる。キリスト教では、その背景に旧約聖書に出てくるようなイスラエルの宗教の長い歴史が背景にあり、同時にギリシア・ローマの文化、特に倫理や哲学の接触があって、神の観念が非常に高度な発達を遂げたわけだから、神の問題がつきつめられるとその内容が問題になってくるのは当然です。しかし一般宗教史や宗教学の立場から、キリスト教とか仏教とかいう高い次元でなしに、もっとそれ以前の段階から考えていくと、そこでも神という観念は既にいろいろな次元で考えられているということがあるわけでしょう。神というのは非常に一般的な概念で、たとえば

での弁証です。カントは、さっきいわれた理性の自律を基礎にしている限り、信仰とそのドグマを基礎にすることは、神話への逆戻りと考えた筈です。

そこで、さっきの、悪と罪と魔との間の次元の違いというのですが、悪は人間対人間の関係を出ていないが、罪は神と人との関係の上での問題で、一方は倫理的、他方は宗教的で、その違いは質的である、ということでしたね。罪とか罪業とかは、自分が神或いは仏に対して犯したものだから、神に面して神罰をおそれる。その「おそれとおののき」のうちで罪が自覚されるという意味でしょうか。ところで罪は自分自身の力では脱却できない。神が怒りを鎮め、神が宥すということがなければならぬ。ひとえに神の、または仏の側からの救済の力とそれへの信仰によつてのみ救われる。神とか仏とかの恵みである救いのもとで、自分が悔い改めてその神または仏を信ずる。この救いの自覚である信仰が第三の次元で、罪の自覚の次元と質的に違うといわれる。罪のいや増すところ恵みもいや増すということだから、それは罪のおそれとは次元の違ったよろこびでしょう。(ただ、

そのよろこびのなかにも、いや増す罪という自覚もある筈で、そこに罪の自覚の完成があるとはいえないかとも思います。) この次元で魔が考えられています、それについては後でふれます。

これは非常にはっきりと筋の通った論で、それとしては充分理解できると思います。ただ一つお聞きしたいのは、次元の違いといわれることについてですね。悪の場合は人間と人間との関係という倫理の次元で、これは普通人間性についての事柄ですね。良心といわれていることも、どの人間の本性にも係わることで、すべて一般倫理学や道徳哲学の問題です。ところが罪及び魔は宗教の次元のことですが、この宗教は信仰中心のだから或る特定の、固有名詞で呼ばれる神とか仏(エホバとか阿弥陀仏とかのような)へのパーソナルな関係で、いわゆる絶対他力的な宗教ですね。そうすると、具体的には、例えばキリスト教、特に新教的なそれか、又は浄土門仏教、特に真宗的なそれ、というような、何か或る特定の宗教の信仰に入ることにならないでしょうか。

悪の次元から罪の次元へ進むのが、人間の宗教的自覚

の展開だとすると、そのためには、例えばプロテスタントの信仰者とか真宗の信心家にならねばならぬ、ということなのか。それが、理性の自律といわれる自覚に立つて、一切の信仰を規準にすることを拒否して来た者に可能であろうか。可能であるとすれば、如何なる仕方ですか。そういう問題が一つあります。

倫理的な悪の次元から宗教的な罪及び魔の次元へという図式は、はっきりしていますが、しかしそれが、理性の立場から信仰の立場へ、という意味を潜めているので、問題が出てくるのだと思います。というのは、さっきもいったように、啓蒙された理性の成立が、人間における根本的な自覚であつて、その意味で一つの決定的な転換であつたから、それが信仰によつて超克されることは容易にはできないからです。プロテスタント神学のうちからは、哲学や道徳を含めて理性の立場が信仰への道の障害となるから、それを放棄することによつて信仰への路を開くという道がよく説かれたが、それは永続的な成功はかち得られませんでした。理性から宗教とその信仰へという飛躍の可能性が確立されるためには、その飛

躍の軌跡がなんらかの仕方で構成的に構築されることが必要です。これはかつてカントが遂行したような意味での「図式論」の構築で、方法論上の問題ですが、理性と信仰という問題では、とてもむづかしい筈です。しかし例えばキェルケゴールが『哲学的断片後書』で、宗教的意識の分析のなから、宗教性Aと宗教性Bとの区別と連関を展開したこと、他方で、神学的な教義論の領域の内部に、「第二哲学」とか「第一倫理」とか彼がよんだような場を開こうとしたことなどは、見方によっては、そういう図式論のための準備工作と解されないこともありません。現代のブルトマンとその学派、或いはティリツヒの業績などのうちにも、同様な意味を認めることも出来るかも知れません。

最後に、第三の次元で魔が救済の神への対立者として、真に魔として、現われるということですが、これも理解できる説です。同時に、魔も神と同様に、一般宗教史の原始的段階からいろいろな形で現われているのが、あなたのいわれた頂上のところでは、魔がその悪や罪よりも高次な、もっと根本的な力として、神の最も高い形

に対立して現われる。しかし同時に、他方では、悪や罪よりも以前な、プライマリーなものとして、はじめから考えられていると見ることも出来ないことはないですね。そういうことがあるから、頂上では神に対立して悪魔として現われても、その裏に原初的な性格を含んでいるものという形で解釈して行けるんじゃないかしらとも思います。

阿部 倫理的な悪の次元から宗教的な罪および魔の次元へすすむという場合、そこに信仰の立場が入ってくることになるのではないか、又そこには信仰と理性の対立葛藤という問題が介在するのではないか、というお話だと思いますが、罪ということが自覚される場所では、当然信仰という立場が入ってくると思います。そして理性、特に近代的な自律的理性の立場との対決に入った時、中世的な信仰ではそれが真実とされていたことも、自律的理性を撥無している限り、真の真実とはされないで、真実のままで虚偽だと自覚されてこざるをえないと思うのです。ここに魔の問題が入ってくるわけですが、私自身としては、このような信仰の立場にからまる魔の

問題の他に、悟りの立場にかかわる魔の問題も、少くとも同等に重要な問題だと思っています。実はこの「非仏非魔」という論文でも、信仰の立場にからまる魔の問題よりも、悟りの立場にかかわる魔の問題に、より多くの頁をついやしたわけです。そして悟りの立場での魔の問題という時には悪とか罪とかいう問題よりも、死とか無明、更には空の自覚への執れ、法身の自覚への執れ、というような問題が出てくると思うのです。それについては、またあとでふれる機会があるかと思いますが、さきほど最後におっしゃったのは、悪や罪より高次なというより、むしろ、それらより以前の原初的な意味での魔をも問題にする必要があるのではないかという御指摘であったと思います。つまり先生のおっしゃるのは厳しい意味での倫理とか宗教とかいうものの以前のところでの、もっと生なまな生の次元で問題となるようなもの、例えばさっきのデーモンとか、あるいは鬼とかいうようなものですね。

八、ダス・デモーニッシュエ

なるわけでしょうか、どうでしょうか。

西谷 曖昧なことになるかも知れませんが、まあデーモンのというか……。

阿部 デーモンのなものです。むしろそれが人間にとっていちばん根柢的であってその一つの特異な、つきつめた形がキリスト教的な悪魔とか仏教でいう魔とかいうことになる、というお考えですね。キリスト教の悪魔とか仏教の魔は、そういうデーモンとは、違っていませんね。

西谷 非常に違ったニュアンスをもっていますね。

阿部 そうするとキリスト教的な悪魔や仏教的な魔とはさらに違ったような、非常に広くて、しかし底の知れないようなデーモンのなもの、人類すべてに通ずるような暗さとしてあるデーモンのものを別個に考えなければなりません。先生が昭和三十三年頃にお書きになった「倫理を超えるもの」(筑摩書房『講座現代倫理』I所収)という論文では、悪魔的なものとダス・デモーニッシュエ(魔神的なもの)とは区別する必要があるとおっしゃっているんですけれども(笑)、そのダス・デモーニッシュエというのと、さっきのデーモンというのとは、同じことに

西谷 概念は同じです。ただダス・デモーニッシュエという場合は、とくにデーモンのな性格に重点を置いて、その面を強調して使われる。その時には、divine(神的)或いは göttlich(神的)なものという概念に対して、それと違った、「魔的」又は「魔神的」な性格のものという概念として、近代によく使われて来ていますね。原語であるギリシア語でも、そういう違いはあって、「神的」(theos)なものに対して、片方はデーモンという。「神的」のほうは、キリスト教ほどではなくても、なんとなく人格的な感じがあるらしい。ちょうどギリシア神話に現われた神々が、非常に人間的な神ですけれども、人間のもっていないような美しさをもっているとか、威厳や威力をもっているというような、そういう性格でしょう。ギリシア神話の神々は民族の文化と結びついているからすでに高級化したもので、そこへいくとデーモンというのは、なんとなく人格性の方にはつきり自覚化されきれない、人格以前の感じのものでしょう。そういう存在として、どこか、無意識性というか盲目性というか、と

にかく怪しげな暗さを含んでいる。そのかわり善い悪いの分別の見境もたないようなもの、それ自身の相も善いのか悪いのか区別もつけにくいようなものということでしょうね。神々のほうはそれとはちがって、キリスト教の神などについていわれる精神的な品格、神としてのパーソナリティ、とまでいなくても、とにかく人格性をもっている。だから「擬人化」されている。そういう擬人化以前の、人間以前の相をもっているのがデーモンの感じ……。

阿部 ダス・デモーニッシュエもそうですか。

西谷 ダス・デモーニッシュエ(デーモンのもの)も多くの場合、或る人間のうちに含まれている一種の超人間的な、しかし人格性以前のものという暗さをもった力についていわれているわけけれども、しかしそれは人間の奥にある自然性から出てきたという感じでしようか。日本でいうと、どういう言葉になるかな。たとえば……

阿部 邪鬼……。

西谷 邪鬼はどうか。天の邪鬼ならまだいいが。むしろ、さっきあなたのいった「鬼」。なにかを一所懸命

になってやる時、あれは学問の鬼だとか、事業の鬼とかいう、その感じに近いですかね。

阿部 何かに憑かれて。

西谷 盲目的といえるほどの集中力をもって、われを忘れてやっている。熱中している。そういうことだから、いるんなことを考えたり、反省したり、ぐずぐずしたりしない。近ごろの言葉でいうと、無意識といたり、深層心理といたりする、そういう処から出てくるような氣力。生命の奥から出る「氣」の力。なにかそんな感じのことが、デーモニッシュエ(デーモンの)ということにはあるんでしょうかね。「魔」とか「鬼」とかいうのにもそういう一面があると思いますね。

阿部 先生のこの論文でおっしゃっているのは、悪魔とかトイフェルは、人間の倫理的、宗教的な生き方において、神への方向から倫理以前の次元へ人間を引き降そうとする力であり、神的なものに対する消極原理というか、否定原理として考えられるけれども、ダス・デモーニッシュエは、神への方向と本質的に全く別な方向を開く立場で、たとえば神にたいする罪の意識を否定するよう

な立場であり、人間が神に背く罪を感じるそのものとなるようなものを自覚的に拒否して、それと戦うような方向で人間が自己を肯定するという、そこにデーモニッシュエなものが出てくる。これは虚無を主体化する真の無神論の立場というもののつながりにおいておっしゃっているの、自覚としては非常に高いところでの話ではないかと思いますが。

西谷 その場合でも、一応は自覚的な立場だけれども、やはり自我意識というような反省的なものを越えた、もっとそれ以前の直接的なものを、自分の底に、自分のほんとうの力として見ているというか、そういうことだと思えますね。それで、もしさっき挙げられた私の論文で私が罪ということを問題にして、デーモニッシュエなものが罪の意識というものに反抗するというふうにいったとすれば、それは多分、罪というものの根本がやはり自我意識、つまり「われ」、エゴというものの自身にあるからでしょう。自我意識ということが、神から離れ去るとか、神に叛くとかいう方向を含んでいる。アダムが神に禁じられた知恵の木の実を喰ったので、楽園から追

放された、それがアダムの原因であって、人間界のあらゆる罪の源泉であるといわれる。ところが、デーモニッシュエというのは、むしろその自我意識のもうひとつ奥にある、今でいうと深層心理とか無意識とかの領域にあって、自然と直結した生命力とでもいうべきもの、それを肯定的に見たのがデーモニッシュエということでしょう。あなたのさっきいわれた人間理性の自律性ということとは違った、むしろそれと対立的なものです。けれども、人間の主体的な自覚の方向としてはそれと結びついている。

阿部 それは、同じ主体的な立場であるといっても、倫理的宗教的な方向とは正反対な方向に立つもので、倫理的宗教的方向に対してネガティブというか、それを裏返したようなところでの主体的自覚ですね。

西谷 そういう方向を肯定するという立場ですね。主体的自覚を神への罪とは思わない。科学者が科学する時の思考活動、技術者が技術を働かす行為、それらも人間の主体的自覚の現われですが、やはり罪の意識と結びついていません。それ自身としては全くニュートラルで

す。しかしそれらは人間的意識という反省又は対自性の次元に現われるものだから、デモニッシュエとも違いますが。両者の間には、「知性」の明るさと「無意識」の暗さとの違いがあります。ただ、さっきいったように、科学や技術の働きのもう一つ奥には「魔」的なものが潜んでいるということも、現代における魔の問題です。

九、倫理を超える二つの方向

阿部 この「倫理を超えるもの」という論文では、先生ははっきりと相反する二つの方向に倫理を超えたものを考えておられるのです。一つは倫理を超えて宗教へとという方向で、そこでは罪とか神とか悪魔ということが必然的に問題になってくる。それからもう一つは、宗教と正反対の方向に倫理を超える行き方で、そこでは、神の非存在としての虚無を主体化することにより自己肯定するようなデモニッシュエな方向という、二つの方向を分けて考えておられる。

西谷 それは一応分けられると思います。

阿部 最初の、宗教への方向というのは、わりとはっ

きりしていると思うんですね。とくにキリスト教の場合は、神は義の神であるという面があり、神の掟とか命令とかにそむけば不義である、罪である、という意識が極めて強いですね。そして、それがさらにもう一つポイントが高まると、神に対抗する悪魔ということ、サタンとかデヴィルとかいうことがいわれる。これは全く倫理を超えて宗教へとという方向で、そこでの悪魔の性格というものは、かなり明瞭だと思うのです。これに対してデモニッシュエというのは、神の非存在としての無神論の主体的徹底において、単に罪の意識が欠如しているというのでなしに、罪の意識を自らの責任において否定するというその方向に出てくる。そして何かをみずから「罪」として規定しようとするその態度そのものと、自分のなかで対決して戦う。そういう意味での自己自身との戦いを通してはじめて倫理以前の自然的なものが、倫理を超えたところでの倫理の否定というところへ高められてくる。そこにダス・デモニッシュエということが出てくるんじゃないかという……。

西谷 そうですか。それなら今でも同じような考えで

す(笑)。ぼくには、現代のいろんな問題を考える場合に、抽象的な神と人間の罪というだけの枠組では余り抽象的で、近代の人間のもっているいろいろな問題は汲み取られ得ないのではないかと、そういう気持ちから前からあったわけです。それで、近代の人間が無神論にならざるを得ないという傾向の根本に、今あなたが挙げられたようなデモニッシュエなものへの方向があると考えたいと思います。

それは神に対する悪魔というより、古代のデーモン、「魔」ということで言い表わされる方向ですが、それとは別に、臨済のような場合は、今まで話してきたようなコンテクストのなかで一体どうなるんでしょう。この場合も、悪魔というよりはデーモン(魔神)に近い感じがあります。さっきデーモンは反省以前の盲目的なところがあるといいましたが、臨済の場合、或いは広く仏教の場合、「魔」が単に盲目的のといっているのではないでしょうが、しかしやはり自我意識の枠を踏み破ったようなところがある。禅では盲目、「瞎」ということが、反語的に、いい意味で使われてもいる。もちろん仏教の場合、仏は

覚者ですから、やはり自覚という契機が必要なんで、最後まで「覚」ということが貫いているといえる筈です。そういう方向からは、最後には、あなたのいわれた臨済の「非仏非魔」が残るでしょうが、とにかく一応、仏への方向が柱としてあって、それに対して魔の方向が対立的に出されてくる。そしてそれは悪魔というのと性格がどこか違う。どことなくデモニッシュエに近い。臨済の場合など特にそうです。

仏への方向という場合は、どうしても自己というものを捨てていくことが基本ですね。キリスト教のように原罪の自覚というようなことを通してではないとしても、さっきいわれた生死とか輪廻とか、それと結びついているいろいろなことを脱して、むしろ否定して、涅槃に入る。これは無我の境だが、単なるトランス(恍惚)ではなくて「覚」、つまり正覚です。だから私の否定、自己否定の方向が一貫していて、それが真正な自覚の道である。そこに、近ごろの言葉でいうと、「対自性」という契機が入っている。自己否定的に真の自己をさるという構造が入っている。それに対して、他方、魔の方向は、それと

違ってもっと「即自的」というか、要するに自分自身のうちにある無意識的で超人間的な力の発動ですね。それが発動する時は、一種の自然必然性をもって自分のうちに入ってくる。だから、倫理的にもニュートラルで、倫理的な善ではないが、必ずしも倫理的な悪でもない。それはそれなりの独自の性格と意味をもっている。人間が憑かれたように何かに熱中するという場合、その「熱」といわれる力是一种独自のものです。これにも人間の主体的な自己理解というところがあるから、広い意味で一種の自覚態ともいえるが、あくまで反省以前で即自的だから、正覚という本来的な自覚の方向とは違った、対立的な方向ですね。臨済なんか魔とっているのは、そういうデモニッシェという意味のほうが強いのかもしれない。

(以下次号)

(にしたに けいじ・京都大学名誉教授)
(あべ まさお・クレアモント大学教授)